

信頼関係づくりから閉じこもり改善へ

菅野 佑茄（介護福祉士）

庄司 美紀（介護福祉士）

株式会社 福祉のひろば 児童営業所

Key words：信頼関係・閉じこもり

1. はじめに

竹内は『「なじみの関係」は援助の基本条件たる「コミュニケーション」への道を拓く。人は孤独だと意欲がわからない』と述べている。今回このようなことを改めて実感することが出来たので若干の考察を加えて報告する。

2. 事例紹介

- ・ S 氏 男性 85 歳
- ・ 要介護度：要支援 2
- ・ 既往歴：糖尿病・肺気腫・喘息・前立腺肥大・肺炎
- ・ 障害高齢者の日常生活自立度：J2
- ・ 認知症高齢者の日常生活自立度：I

3. 生活歴

高出生生まれ。30 代で結婚し娘が 1 人いるが離婚し 15 年間単身生活を送っていた。仕事を辞め今後は不安になったため H20 年 12 月より富士の湯へ入居となった。

自転車に乗り外出し囲碁クラブにも通っていたが、持病が悪化した事もあり閉じこもりがち生活になっている。

- ・ 家族構成：本人(サ高住入居)
- ・ 主介護者：娘(新庄市在住)

4. ケアプラン

H24 年 4 月より当事業所の DS を閉じこもり防止を目的として利用を始めた。H27 年 3 月末頃より DS 1 日利用が疲れると 4 月に DS をやめたいと話がある。利用をやめてからは外出、運動の機会が減り体力が低下した。そこで体力をつけ外出の機会を増やすため半日 DS を勧め閉じこもり改善と孤立・孤独からの不安の解消を目的とした。

5. ケア方法・展開

H27 年 3 月 26 日「DS の 1 日利用が大変」「気持ち的に疲れる」と話があり休みがちになるが DS のスタッフが居室まで行くなど連れ出しを行い利用につなげていた。

その後、退職や異動などでなじみのスタッフや気にかけてくれるスタッフが現場から離れてしまうと利用をやめてしまった。DS をやめたことにより居室で過ごす事が多くなり体力低下、閉じこもりが心配された。さらに、閉じこもりになることによって孤立・孤独から今後の不安

も増すと思われ、サ高住での生活を不安なく続けられる様、関わりを持つことから始めた。

取り組みとして、外出・運動の機会が必要だと考え、毎日のバイタル測定時に外の話、今日の予定など些細なコミュニケーションから外に気持ちを向けられるよう声かけを行なった。

声かけし関わり続けたことで、「リハビリだけならしてみたい」「外には行きたいという気持ちはあるが、体力・体調の面で不安」との話がきかれるようになった。

そこで、外出の機会を設けるため、事業所を変え外部の DS 利用を目指したところ、短時間で利用できる DS があることがわかった。その話をすると「試しに体験で行ってみようかな」という声がかかれ変化が表れた。

体験利用後は本人も楽しかったようで笑顔がみられ「DS をやってみよう」という意欲もみられた。そして、H27 年 9 月に短時間の DS 利用開始となる。

6. 結果

なじみのスタッフが居なくなった事で DS をやめてしまい、体力・活動量の低下、閉じこもりもみられていた。バイタル測定時にまめに声かけを行い、体験で短時間の DS 利用を勧めた事によりイメージがわき再び意欲が見られるようになった。そして週 2 回 3 時間 DS の利用を開始することが出来た。

今回、DS を利用した事で閉じこもり改善、体力・活動量の向上に加え以前より会話が増え笑顔もみられるようになった。また、信頼のおけるスタッフとも出会い DS の利用を楽しみにする姿もみられた。

DS でも友達ができ、利用日以外に外出し友達と将棋を楽しみ他者との交流もみられていた。

しかし、昨年 12 月なじみのスタッフ気にかけてくれるスタッフが辞めてしまい、再び気持ち的に落ち込み H28 年 2 月より DS を休んでしまう。

7. 考察・今後の課題

竹内は、『職種や施設の他にそこに登場する「人」も重要な資源とする考えがある。これはサービスクエアにあたるスタッフの「人柄」だ』と述べている。

孤立・孤独の人はなじみの関係、気にかけてくれるスタッフ、友人が大切であり S 氏にもあてはまると考えられる。困難事例にもあるように DS 利用拒否のある利用者には異性のスタッフをあてると失敗はないとの事からも「対人サービス」とは人と人のつながりで、これは特別な事ではなくケアの 1 つであり、その人にあったケアと言える。

今後は、その人の人柄、価値観を理解しサ高住でも対人

関係、コミュニケーションを大切にし、散歩や外出など
外に目を向け DS 利用再開を目指していきたい考える。